

長岡さんに惜別の言葉を捧げます。

長岡さん 呼吸が楽になりましたか。身体の辛さも楽になり名前の通り伸び伸びと広々とした気持ちでゆっくりとしていらっしやると思います。

誰にも面倒をかけたくないという長岡イズムというか長岡美学は分からない訳ではないのですが、一人で頑張り過ぎたと思います。

最期を病院で呼吸や身体の辛さを管理、緩和してもらえたことは、ほんとうに良かったと思います。

水沢さんが「よお 長岡 来たが〜、六左衛門さんが「長岡くん」と迎えに出て酒盛りが始まっているのではないのでしょうか。

長岡さんと初めてお会いしたのは私が入会した年の支部晩餐会でした。

「知ってるごども 知らねって 言えってが」とぶつぶつ言っている人がいて、山岳会にはおもしろいオジサンがいるというのが第一印象でした。

それから三十数年のお付き合いですが、

なんと私は長岡さんのことを何も知らないのです。何故山が好きになったのか、いつ山岳会に入ったのか、好きな山は何処か等々。

自分のことは何も語らない人でしたね。

長岡さんと面と向かって、車座になって、膝を突き合わせてワイワイお酒を飲んだこともないことに気づきました。いつも事務局として会の運営や一人ひとりのことを気遣って、お世話係に徹していました。

村上春樹氏という「雪かき仕事」をいつも黙って担っている人でした。

「雪かき仕事」というのは、地味で容易でなくて、でも誰かがやらなければ世界のバランスが崩れてしまう、そういう仕事のことだそうです。

日本山岳会山形支部の雪かき仕事を引き受けて、最後まで頑張ってくださいました。

ベニバナ国体の仕事、山形支部創立六十周年記念事業、中央分水嶺の仕事、後になった支部報「山」など ほんとうに大きな足跡です。

先日 「妻子がなくても、寂しくない。

地位も名誉も欲しくない。

金がなくても、嘆かない。」

とうとうまさに長岡さんのことを言っているようなフレーズの山崎放代歌集を見つけました。

おもしろがってくれそうで、病床の慰めになればと送る用意をしていた矢先でしたが、間に合いませんでした。

山を愛し、酒を愛し、蔵王の山小舎を愛し、温かいご兄弟に見守られ、絵の才能に恵まれ、幼馴染の友や沢山の山仲間にも愛され、逝くのは少し早かったけれど「goodだべ〜」とホッと笑っていらっしやるような気がします。

私がそちらに行くときは、いつものようにモタつく私を「何やってんだず。こっちだべ〜」と向こう岸まで迎えに来てくれるであろうことを確信しています。それまで さようなら。

ほんとうにお世話になりました。有難うございました。心から御礼申し上げます。

どうぞ安らかに眠りください。

令和元年六月一日

佐藤 映子